読者のひろば

世界で活躍できる青年僧の育成が急務

タイの世界仏僧会に参加

全真言国際救援機構理事長
世界連邦日本仏教徒協議会事務総長
水谷　栄寛

タイで開催されたWFB（世界仏僧会）に5月21日から5月25日まで参加してまいりました。

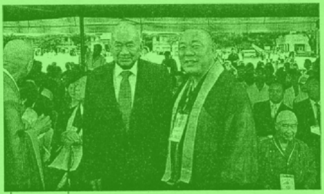
この大会はわが国も所属しているWFB（世界仏教徒連盟）の主催によるもので、仏暦2600年、国王85歳と王妃80歳に皇太子60歳の誕生日をお祝いする目的もあり、世界各国から多くの僧侶が招待されました。

日本からも私を含め多くの僧侶が参加しました。全日本仏教会からは奈良総務部長、鈴川国際部長、関崎事務総長、戸松前事務総長が参加されていました。日韓仏教交流協議会の宮林会長、明照学園の佐藤理事長、臨済宗妙心寺派の則竹老師、全日仏青の村山理事長、孝道教団の岡野ご夫妻、国際仏教興隆協会の正本事務総長、超宗派の国際通の方々の顔がそろいました。

チュラロンコンという日本でいうと灘校、湘南校に匹敵する進学校での平和の祈りを皮切りに、いくつかの会場を渡り世界平和樹立のための話し合いがなされました。日本のスピーカーとしてNTTの和田会長のお話に参加者が熱心に耳を傾けていた様子がとても印象的でした。

23日にはエメラルド寺院に直接、王妃がおいでになり、各国代表に対しお礼のご挨拶がありました。

毎年5月には国連の提唱で始められたヴェーサクの祭典がタイ国で行われております。このたびの大会はヴェーサクの祭典の約10日前に実施され、参加者にとってはハードなスケジュール調整となりました。われわれの団体（世界連邦日本仏教徒協議会）もメンバーを分けて参加調整をしました。



WFBのファン・ワナメッティ会長と並ぶ筆者（右）

タイ国には仏教三派の凌ぎ合いが存在し、このような事情により同時開催に至らなかったと考えられます。

世界の主な仏教団体は中国を中心とする団体、台湾を中心とする団体、韓国を中心とする団体、タイを中心とする団体、昨年樹立されたインドを中心とする団体に分けられます。しかしながら、どの世界大会の参加者の顔触れもあまり変わりなく、各国代表による交流会といったイメージです。

参加者の中で真言系の参加者が極端に少ないのも現状です。世界大会に参加している日本人僧侶の多くは団体で行動し、他の国の方との交流をされている人は本当にわずかです。

日本人の国民性と言ってしまえばそうなのかもしれませんが、数万円から数十万円の費用を自己負担して参加しておられるわけですから、たとえたどたどしい英語であっても、一人でも多くの方と交流すべきではないでしょうか。

世界の国々と強いパイプをお持ちになっている日本の高僧の方々もかなりのご高齢をお迎えになっています。巧みな英語力を操り、世界の舞台で活躍できる若手の人材育成こそが急務と考えます。

「少年よ、大志を抱け」と言われたクラーク博士の言葉のように、今こそ青年僧がグローバルな視点に立って日本仏教会を牽引する力となっていただけることを切にご期待申し上げます。

お寺のイメージをダイナミックに変革

臨済宗妙心寺派永正寺副住職
中村　建岳

お坊さんから連想する「死」のイメージは、世の中で非常に根強いものがあります。お坊さんが黒衣姿で病院に知人を見舞うものなら、ギョッとする周りの視線と固まる空気。すぐに追い出されそうな雰囲気です。

お参りのついでに用事があって、お宅を訪ね入っていく姿を見た近所の人が連想するのは「○○さんの家のどなたか、亡くなったのかしら？」」。

お寺の近所や日頃なじみのある所でお坊さんを見掛けるのは平気でも、予想外、想定外の所でお坊さんに出くわすその刹那、「怖い」「死にたくない」「お迎えが来た」。まるで死神を見るような視線が突き刺さります。街中でふと霊柩車を見掛けると、急いで「親指の爪を隠さなきゃ！」。まさにお坊さんのイメージの一面は「歩く霊柩車!?」でしょうか。

それほど縁起が悪いお坊さん。できれば関わりたくありません。「私の家には、仏壇がまだ無いから、お寺さまは関係ないでよう」。自分自身や身近な人が健康で元気なうちは、できるだけ死や病気などネガティブなものは考えたくない、関わりたくない。差し迫ったことがあって、初めて人は仕方なく何となく、お坊さんお寺さんとのお付き合いを始めるのです。

もちろん、先祖代々続く本家筋の檀家さんなどにとっては、小さなころからお寺とお付き合いすることは当たり前。自分たちのお寺を支えるために物心ともに協力を惜しまず、とても身近な存在としてお寺があるからこそ、多くの寺院がこれまで発展、存続できてきたのです。それは間違いありませんが、けれども他方で、やはりお寺やお坊さんに対して「縁起が悪い」「できれば（　生）関わりたくない」と思っている人たちは数多く根強く社会風土として厳然と!?存在しているのでしょうし、このことがお寺が「葬式仏教」「葬儀法要仏教」などと揶揄される要因の一つともなっているのだと思います。

「お寺は生きているときはあまり関係なく、死んでからお世話になる所」「死後の世界とこの世をつなぎ、その中間に存在するのがお寺」など世間の一般的!?な意識について、僧職である私には注文を付けたくなるものなのですが、皆さんはいかがでしょうか？

お寺はもっと「生きている私たちに身近な存在」としてあるものであり、仏教は「生きている私たちにとっての普遍的な心のよりどころ」として誰に対しても存在してほしいという願いがあるのです。

例えばキリスト教は、葬儀というよりも、結婚式、洗礼、日曜礼拝など、人が生まれ成長していく過程の全てに、全ての人に関わっていく形態であって、まさに生きていく上でのよりどころであり、聖なるものであり、決してイコール死を連想させるネガティブイメージのものではありません。

私たちの仏教そしてお寺は、本来、そのような姿を目指していかなければならないのではないでしょうか？

死生観や葬儀に対する考え方が大きく変わっていこうとしている今こそ、私たちはお寺に対するイメージを本質的に変容させる取り組みが求められているのだと思います。そして、今後のお寺の行く末を左右する大きな課題なのではないでしょうか。

仏前結婚式の普及とその前提となる婚活支援。子どもが生まれたらお寺参り。成人の際に2文字の生前戒名を——これまでの20年間とこれからの希望を込めて。お寺でのコンサートやイベントなど。うつ病予防として仏教的考え方を基にした低ストレス社会の実現。「癒やしの日」としての4月8日の国民的行事化などなど。このような取り組みの全国規模化を提案したいと思います。

まさに「生きている私たちにとっての身近なお寺、心のよりどころ」を目指してのお寺改革。ダイナミックな意識の変革。より多くの寺院が協力して工夫しながら取り組んでいくことができれば……。お寺の持っている力、眠っている能力を見つめ直し、もう一度掘り起こしていく、いわば「寺おこし」。一緒に連携、協力して活動を始めてみようかという方、同じような思いの方はいらっしゃいませんでしょうか？

（愛知県江南市高屋町中屋舗46）

● 「読者のひろば」の投稿を歓迎します ●

1、400字詰の原稿用紙なら4枚以内を目安にして下さい。
1、匿名は原則として認めません
（ペンネームの場合も本名併記）。
住所、電話番号などを付記して下さい。
1、投稿原稿、写真などは返却いたしません。
1、掲載をもって採用の連絡に代えさせて頂きます。

FAX番号は
京都総本社 075-671-2140　東京本社 03-3811-5222

Eメールのアドレスは
henshu@chugainippoh.co.jp

中外日報編集局